



2008年3月9日

# いま起きつつあること…

高橋哲哉さんの  
平和講演会から



その  
3

引きつづき、高橋哲哉先生のお話の要旨を紹介します（あと2回つづく予定です）。

## 軍隊は国民を守らない

いま、日本の国の為政者たちは国民の意識を「戦争を支えるもの」に変えようとしています。「国民はいつでも国のために命を捨てても国と天皇のために尽くしなさい」と教えた「忠君愛国」の思想を復活させようとしているのです。

自衛隊のトップだった栗栖くりす

弘ひろ氏あみ氏は「今でも自衛隊は国民の生命、財産を守るものだと誤解している人が多い。しかし国民の生命、身体、財産を守るのは警察の使命であつて、自衛隊の任務ではない。自衛隊は国の独立と平和を守るのである」と明言しています。

また、潮うしほ匠まさひと人ひと氏はその著書『常識としての軍事学』で、軍隊の本来の任務は、国民の生命・財産を守ることではなく、「日本の伝統文化」を守ることであり、その文化とは日本の皇室文化と無縁ではないと主張しています。

つまり、軍隊が守るのは天皇を中心とした国家体制であり、国民ではない。むしろ、国民には自らを捧げて国を守る責任があると為政者たちは考えているのです。

## 国民の犠牲はやむを得ない？

自民党の久間章生元防衛大

臣ひらは、国民保護法制に関して「国家の安全のために個人の命を差し出せなどとは言わない。が、90人の国民を救うために10人の犠牲はやむを得ないと判断はあり得る」と言っています。

久間氏は、安倍前首相のように「国のために命を差し出す」と言えば反発されるからそうは「言わない」と言っています。が、為政者は「国民はどこまで大きな犠牲に耐えられるか」という計算を常にしているのです。できるだけ多くの犠牲に耐えられる意識を国民に持たせようとするのです。

## 武力は必要と考えることの危険

国民が国を守るべきという考えは、安倍前首相の美しい国思想、自民党の新憲法草案にはつきりと見て取れることですが、一方で私たちは「外国の脅威に対して、やはり武

力は必要だ」と考えてしまいがちです。

しかし、そのように考えていると「いざとなったら国民が命を捨てても国を守る」という考えを否定できなくなるのですと、高橋先生は強く警告されました。

いま、日本の国は一つの方  
向に向かって進み始めており、この国の為政者たちは、その道に進むための体制を着々と整えようとしています。

先日、自衛隊のイージス艦が漁船の清徳丸と衝突する惨事が起きました。自衛隊や為政者たちの対応からは、「軍隊は国民を守らない。むしろ国民の命さえ犠牲にするものである」との高橋先生の警告がより強く響いてきます。

私たちはいま、この国で起きつつあることを、目を覚まして見抜いていかなければならないのです。